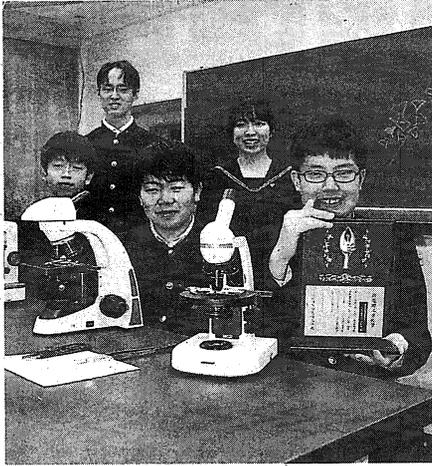


県立藤島高SSH研究クラブ生物



読売理工学院賞を受賞した藤島高のメンバー（福井市で）

「イチヨウ精子の研究 seasonⅢ」

先輩の積み重ねを発展

イチヨウは、種子植物の中でも、生殖細胞として精子を形成する数少ない植物

とされている。同校OBで明治、大正時代の植物学者・平瀬作五郎が初めて、イチヨウに精子が存在することを発見していた。過去のメンバーの研究を受け継ぎ、2年の飛山太さん(17)と本谷京太郎さん(17)、安間仁之輔さん(17)、1年の河野広嗣さん(16)と野路れい奈さん(16)の5人が、イチヨウに向き合った。昨年8月下旬から、採取した約600個のギンナン

藤島高に読売理工学院賞

学生科学賞 武生高は入選3等

全国の中高校生が生物、地学、物理、化学などの分野で研究成果を競う「第65回日本学生科学賞」(読売新聞社主催、旭化成協賛)で、県内からは高校の部で、福井市の県立藤島高SSH研究クラブ生物の「イチヨウ精子の研究 seasonⅢ」が読売理工学院賞、越前市の県立武生高グローバルサイエンス部断層班の「地下水の分析で断層のルート解明」が入選3等に選ばれた。地道に積み重ねた研究が評価された2グループのメンバーに喜びの声を聞いた。

(山内浩平)

をカッターナイフで切り、イチヨウの精子を顕微鏡で観察した。その結果、イチヨウの精子は1週間程度かけて形成されると結論づけた。家に顕微鏡を持ち帰って

まで観察を続けたという飛山さんは「先輩たちが見つけたノウハウがあるからこそ出た成果。ここまで評価されるとは思わなかった」と喜ぶ。研究を指導した橋本由香里教諭は「根気強く調べた結果で、理解も深まった」とたたえる。

2年生3人は受験に備え、研究を離れることになった。本谷さんは「たくさん数をこなせばできるはず。成功させて、さらに上の賞を取ってほしい」とエールを送る。

研究の最終目標は、イチヨウの精子の誘引物質を発見すること、今後は1年生を中心に取り組みを続ける。野路さんは「先輩たちの積み重ねを受け継ぎ、発展させたい」と意気込んでいる。